

岩手医科大学歯学会第19回総会

日時：平成5年11月20日（土）午前10時30分

会場：岩手医科大学歯学部講堂

演題1. ノンアスベスト系裏装材の応用とその効果

○高部 明人, 池田 政明, 小塚 照夫,
桂 啓文

岩手医科大学歯学部歯科理工学講座

従来から使用されてきた裏装材としてのアスベストリボンによる発癌作用が問題視されて来ているため、最近アスベストリボンの代替えとして、セラミックファイバーやガラス繊維などを用いたライナーが使用されるようになった。今回、我々はアルミナ・シリカ質繊維性セラミックスペーパーを用いた時の冠、MODインレーの鑄造精度について実験を行い、市販しているアスベストリボンとニューキャストイングライナーと比較検討を行った。セラミックペーパーはアスベストリボン、ニューキャストイングライナーより吸水量は少ない。セラミックスペーパーを使用した場合、硬化膨張は乾燥状態でニューキャストイングライナー、アスベストリボンより小さく、湿潤状態ではアスベストリボンと同程度の値を示した。乾燥状態での熱膨張は約1.0% 湿潤状態でも変わらない。冠の鑄造収縮率は乾燥および湿潤状態でもセラミック系の裏装材は、アスベストリボンより大きい値を示し、MODの浮き上がり量でも同様な傾向が見られた。ニューキャストイングライナーと比較してもセラミックペーパーは遜色ないことから、裏装材として使用することは可能である。

演題2. 下顎第二大臼歯抜去後における第三大臼歯の動態に関する臨床的研究

○亀谷 哲也, 清野 幸男, 及川 広美,
吉成 良子, 石田 容子, 石川富士郎

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

臼歯部における歯と顎骨の不調和を解消する手段の一つとして、第三大臼歯の早期摘出があるが、その時

期を逃した場合には、第二大臼歯の抜去によって第三大臼歯の萌出誘導を行うことも可能である。今回の報告は、第三大臼歯胚歯冠部の形成がほぼ終了した段階で第二大臼歯を抜去した13症例、26歯の臨床観察についてである。抜歯の時期は、11歳9カ月から17歳2カ月の間で、このうち第三大臼歯萌出後の咬合状態では、良好なもの18歯、第一大臼歯との間に空隙が認められたもの7歯、完全萌出に至らなかったもの1歯であった。45度斜位頭部X線規格写真により、歯胚の位置の変化を確認できた7例13歯について、顎骨内における歯胚の発育に伴う移動をみると、およそ3方向に分けられた。1群は、第三大臼歯歯軸が一旦は直立して萌出後近心傾斜を示すもの、2群は、歯胚は近心傾斜しながら移動するが、直立して萌出するもので、3群は、歯軸の変化はなく萌出するものであった。また、良好に萌出した第三大臼歯の歯軸は下顎下縁平面に対して約60度から80度の範囲にあった。下顎第二大臼歯抜去後、第三大臼歯の萌出に必要な空隙をRicketts (1979) による下顎枝の midpoint (Xi) と、第一大臼歯遠心縁との距離で検討した。これによると、半埋伏の状態となった1歯では25.7mmであったが、萌出の良好であった8例では、30.5mmであった。この空隙の大きさは、Ricketts が第三大臼歯の歯列内萌出の基準としている Xi 点から第二大臼歯遠心縁までの距離25mmに相当するものであった。このことはまた、日本人不正咬合者では、臼歯部の不調和を解消するためには、第二大臼歯、あるいは第三大臼歯の抜去を必要とする例が極めて多いことを示唆するものであった。

演題3. 多変量解析による総義歯患者の病態像の把握

○黒田 直寿, 中嶋 庸晃, 黒沢 正雄,
児玉 厚三, 虫本 栄子, 田中 久敏

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第一講座

初診時の総義歯患者を診査する過程で、旧義歯の形態・機能的な問題点の情報を得ることができる。これらの情報から咬合のメンテナンスに対する危険因子